様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24　年　6　月　6　日現在

機関番号：35309
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2011
課題番号：21792348
研究課題名（和文）病的賭博者家族の自助グループ参加による内面的成長過程
研究課題名（英文）　Inner Developmental Process of pathological gambling families associated with participation in self-help groups

研究代表者　齋藤　美紀
（SAITO MIKI）
川崎医療福祉大学・医療福祉学部・講師
研究者番号：30515789

研究成果の概要（和文）：本研究は、病的賭博に付随する諸問題に直面した家族が、自助グループへの参加により、どのような変化と成長の過程をたどるのかを明らかにすることを目的とした。病的賭博者家族の自助グループに参加している家族への半構成的インタビューガイドに基づく面接調査と、フォーカスグループインタビューを実施した。面接内容から個人の状況の捉えおよび取り組みに関するデータを取り出し、その本質的な内容を共通性に従って分類しカテゴリーを作り、成長過程という観点でカテゴリーの関係を検討した。
研究成果の概要（英文）：
The purpose of this study was to clarify the inner developmental process of the family faced with various problems associated with pathological gambling, through participation in self-help groups. Research Design was Qualitative Analytic Induction Research.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	300,000	90,000	390,000
総　計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学
キーワード：病的賭博・家族・自助グループ・共依存・内面的成長

１．研究開始当初の背景

「病的賭博」は、ギャンブルに対するコントロールを喪失した状態であり、ギャンブルを優先するために借金を繰り返し社会的信頼も崩していく、進行性の病気である。依存症への初期介入では、家族への対応がその後の問題の解決または遷延化を左右し、初期介入のあり方が重要である。地域における病的賭博者の家族の自助グループでは、賭博者本人の問題に巻き込まれて混乱していた家族が、同じ問題に悩んでいた者同士での感情の分かち合いを通して自分自身の問題に気付き、自分らしさを取り戻す、成長過程をたどっている。そして家族の対応の変化が、病的賭博者自身にも影響を及ぼし、本人が自分の問題と直面し、回復への道を歩み始めることもある。

２．研究の目的

病的賭博者の家族の主観的な思いや状況の捉え、取り組みについて明らかにする。

３．研究の方法

(1)研究デザイン：質的帰納的研究

(2)データ収集：2009 年 9 月～10 月、西日本の 3 県にて自助グループに参加している病的

賭博者の家族を対象に、半構成的インタビューガイドに基づく個別面接調査を一人1回実施した。
(3)対象者：女性9名、平均年齢49.1歳、病的賭博者本人との続柄は､妻2名､元妻2名、母2名、姉1名、娘2名であった。
(4)面接時間：合計は10時間32分、一人あたりの面接時間は53分から1時間29分であった。
(5)データ分析：面接内容の逐語録を作成し、状況の捉えと取り組みの視点で質的帰納的に分析し、内容を明らかにした。面接内容から個人の状況の捉えおよび取り組みに関するデータ（状況の捉え､取り組み､自己概念､内面的成長の4領域）を取り出し、その本質的な内容を抽出する。共通性に従って分類し、カテゴリーを作り、成長過程という観点でカテゴリーの関係を検討した。
(6)本研究の用語の定義
「病的賭博」：賭博による借金や家庭、仕事など生活の問題が生じても、賭博行為が習慣化、自動化し制御できなくなること。
「家族」：同居別居、戸籍上の続柄に係らず、感情的な絆、帰属意識によって結ばれた一つの集団。
「自助グループ」：同じ問題を抱えた者同士が集まり、相互に支えあうことで問題に対処していこうとする集団。
「参加」：6ヶ月以上定期的に自助グループに出席していることを参加の目安とした。問題に直面した直後の混乱や動揺が落ち着いた状態の目安として、6ヶ月以上とした。

４．研究成果

本研究により、病的賭博者の家族の「自助グループへの参加に至る過程」「病的賭博に付随する問題への対応の実態」「外部への相談に至るまでの体験」「自助グループ参加による病気への認識の変化」が明らかになった。
(1) 病的賭博に関する日本国内の研究動向

医学中央雑誌web版にて、「病的賭博」「ギャンブル依存症」「嗜癖行動」「賭け事」の用語で2004年から2009年の過去5年間の文献検索を実施し、論文種類、研究対象、内容について整理した。

「病的賭博」「ギャンブル依存」「嗜癖行動」「賭け事」での検索結果は100件、論文種類は原著論文20件、総説2件、解説45件、会議録33件であった。原著論文20件のうち、病的賭博者の実態把握を目的とした研究は9件であった。病的賭博に至る過程や発病の危険因子を明らかにする視点での研究や、医療機関での取り組みや介入の効果に関する研究があった。またパーキンソン病、ドーパミン分泌、薬物療法との関連に焦点をあてた症例報告は4件であった。

病的賭博者本人を対象とした研究では、病的賭博者の性格、家庭環境、賭博開始年齢等、病的賭博にいたる過程や、性格傾向から特徴を把握し、若年層への教育的関わりにより発症を予防しようとするものがあった。一方、各機関での取り組み、介入に関する研究では自助グループへの参加等により、ギャンブルをしない毎日を積み重ね、社会復帰を果たしている事例の紹介があった。これらの研究結果は、病的賭博が回復可能な疾患であることを示している。

しかし若年層の病的賭博者の増加の背景には、病的賭博による借金が発覚した時に親が借金の肩代わりをすることでまた新たに借金を繰り返すなど、結果的に家族が賭博をし続ける環境を作り出している実態も明らかになっている。病的賭博による問題行動についての最初の相談は、本人よりも配偶者、親、親類などの家族からもたらされることが多く、家族への初期介入がその後の問題の解決または遷延化を左右する。既存の文献から病的賭博者家族への介入の必要性が示唆された。
(2) 病的賭博者家族の自助グループ参加に至る過程

病的賭博者家族が自助グループ参加に至るまでの過程として、≪病的賭博に付随する問題に集中している段階≫≪病的賭博への関心移行の段階≫≪無力を知る段階≫≪新たな居場所をみつける段階≫の4つのカテゴリーが抽出された。

≪病的賭博に付随する問題に集中している段階≫では、家族は繰り返される借金等、病的賭博に付随する問題への対応に終始する。借金は早く返す、家族は支えあう、という固定観念に基づく行動が取られる。賭け事による借金を恥と捉え、家族内部での秘密の保持、謝金返済のための協力体制が構築されやすい。

≪病的賭博への関心移行の段階≫では、病的賭博者本人への説得、借金返済等を繰り返しても、問題が改善しないため「本当にお金の問題なのか」という疑問を抱く。そして病的賭博が進行性の病気であることを知り、関心の焦点が「借金」から病的賭博や、病的賭博者本人の治療に移行する。
≪無力を知る段階≫では、問題解決に尽力しても期待したような効果が現れず、病的賭博者本人及び付随して起こる問題に対し、「全くどうにもしようがない」という無力を痛感する。
≪新たな居場所をみつける段階≫では、同じ悩みや体験をもち、正直に話ができる仲間と出会い、安心できる自分の居場所として認識し、自分のために自助グループに参加するようになる。

病的賭博者家族が自助グループへの参加に至るまでには、借金返済の肩代わりや本人

の説得、家族間での意見調整、外部機関への相談等の試行錯誤や葛藤の段階があることが明らかになった。

(3)病的賭博に付随する問題への対応の実態

病的賭博に付随した問題として、借金と返済の繰り返し、家事をしない、仕事を辞める、部屋に閉じこもる、失踪、自傷行為、自殺をほのめかす等があり、9 事例全てが何らかの家庭生活、社会生活の破綻と不安を体験していた。病的賭博者本人に対して怒りや違和感をもちながらも、説得、借金返済、生活費の援助、金銭管理、医療機関受診、自助グループの紹介等の対応をしていた。

家族が借金を肩代わりする背景には「借金は早く返さなければいけない」「家族だから家族で何とかしなくては」等、家族を 1 つの単位として捉える認識があった。また賭け事による借金を家の恥として捉え世間体を気にして外部に相談することに葛藤のあった事例が 7 例あった。9 事例とも外部への相談を最初に実施したのは、病的賭博者本人ではなく家族であった。

病的賭博者家族の生活、心身の状況は、続柄にかかわらず病的賭博者本人の言動の影響を受けており、家族が問題に巻き込まれていることが明らかになった。

(4) 家族が外部への相談に至るまでの体験

病的賭博者の家族の自助グループメンバー3 名を対象にしたフォーカスグループインタビューより、病的賭博者の家族は外部に相談するまでに、病的賭博者本人の借金や離職、離婚、自殺未遂、失踪等の状況の変化に悩み、気分が落ち込み、対応の仕方が分からず生活がやりきれなくなるという体験をしていることが明らかになった。しかし病気ではないかと思い医療機関や行政機関等、複数の機関に相談をしても、専門外である、分からない等の回答を受け、病的賭博という病気を理解して説明してくれるところがなく、安心して相談できる場所が少なかったと語っていた。やがて自助グループの存在を知り、家族同士が話をする中で落ち着きを取り戻し、本人の支援(借金返済等)をしてはいけないことを確信し、対応方法を変えていた。

そして病的賭博者本人が回復するには、家族が立ち直り回復することが必要であり、そのためには病気の勉強を続けて、前に進むことが大切であると語っていた。

病的賭博者の家族は苦悩と混乱を経て、外部に支援を求めていた。相談機関の専門職は、病的賭博への対応方法の理解を深め、変化していく病的賭博者本人の状況に、家族が巻き込まれ続けることなく生活を再構築できるように支援することが必要である。

(5) 自助グループ参加による病気への認識の変化

病的賭博者家族は、病的賭博者本人の度重なる借金への対応に疑問を抱きながらも、最初は病気だとは捉えていなかった。親類、知人からの情報が契機となり、「病気かもしれない」と認識が変化し、インターネットや精神科医療機関への受診によって病気の情報を集めていた。ギャンブルに対する認識が【個人の趣味・遊び】から【病気ではないか】へと変化する際の家族の心情には「病気であれば治してもらいたい」「病気のことを知りたい」「治したい」「病気と捉えるのは辛い」「納得できない」があった。半信半疑ながらも【病気ではないか】という認識をもつことにより、家族の行動には「外部に相談する」「勉強する」「本人を自助グループに連れて行く」「家族の自助グループに参加する」等の新たな【対処行動】が加わった。

【病気ではないか】という認識は「病的賭博者本人の自助グループへの参加」によって病的賭博者本人の話を聞くことや「本人の説得の失敗」等が契機となり【病気の確信】へと変化していた。病的賭博者家族の自助グループでは「体験を人に話す」「人の体験を聞く」「ありのままを受け入れる」等により、自分の価値観や感情、行動のパターンを把握していた。【病気の理解】が進むと「借金の肩代わりをやめる」「本人と距離を置く」「自分の行動の傾向に気づく」等、本人の問題と自分の問題を冷静に見極めた【対処行動】が見られるようになった。

病的賭博者家族の病気への認識は【個人の趣味・遊び】から【病気ではないか】【病気の確信】【病気の理解】へと変化していた。病的賭博者家族は自助グループへの参加により、病気の理解を深め、自分の共依存傾向や世間体等の価値観に気づき、本人の問題と自分の問題の境界線を意識した行動を取るようになっていた。これらの自助グループ参加による効果は、アルコール依存症、薬物依存症、摂食障害の自助グループの効果と共通していた。

病的賭博者の家族は、長期間にわたって病的賭博者の借金等の生活上の問題に巻き込まれていた。しかしギャンブルによる借金は意志の問題だという認識や、家族の問題を人に相談できないという羞恥心により、問題を表出するまでに時間を要していた。これは病的賭博が依存症であるという認識が浸透していないことを表しており、病気に関する知識の普及啓発が課題である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 5 件）

(1)<u>齋藤美紀</u>：病的賭博者家族の自助グループ参加による病気への認識の変化、第１回日本保健師学術集会、2012 年 3 月 9 日、東京工

科大学蒲田キャンパス3号館
(2) 齋藤美紀:病的賭博者の家族が外部への相談に至るまでの体験、日本アディクション看護学会第9回学術大会、2010年11月7日、北海道文教大学　恵庭キャンパス
(3) 齋藤美紀：病的賭博者家族の病的賭博に付随する問題への対応の実態、第 36 回日本看護研究学会学術集会、2010年8月21日、岡山コンベンションセンター
(4) 齋藤美紀：病的賭博者家族の自助グループ参加に至る過程、日本地域看護学会第13回学術集会、2010 年 7 月 11 日、北海道立道民活動センタービル かでる2・7
(5) 齋藤美紀：病的賭博に関する日本国内の研究動向、日本家族看護学会第 16 回学術集会、2009年9月5日、高山市民文化会館

〔その他〕
(1)援助者情報交換会「ギャンブル依存症とその支援について」開催、2010年10月12日、川崎医療福祉大学講義棟3603講義
　援助者情報交換会「ギャンブル依存症とその支援について」を開催した。開催目的は、ギャンブル依存症の知識と対応の情報を共有し、家族や本人の支援に活用することであり、会には学外19名、学内9名の計28名の参加があった。研究代表者が研究データの要約を発表し、町田政明氏が講師として、病気の症状と回復過程、援助機関の対応方法等についての講義を行った。会では、医療機関でのギャンブル依存症が疑われるうつ症状患者への対応や、趣味と病気の違いなどについて、質問があった。一般参加者から「もっと早く病気と知っていればよかった」という感想もあり、ギャンブル依存症についての知識の普及啓発の必要性を改めて実感した。今回の企画は、研究結果の社会還元と、関係機関との連携の一助となった。

６．研究組織
研究代表者
齋藤　美紀　(SAITO　MIKI)
川崎医療福祉大学・医療福祉学部・講師
研究者番号：30515789